

# 酒と涙とジキルとハイド

## 笑い過ぎで人格が変わる!? 英国が舞台の劇薬コメディ

もし、飲むだけで“もう一人の自分”になれる薬があったら……。三谷幸喜が新作の題材に選んだのは、あの『ジキルとハイド』だった! 片岡愛之助、優香、藤井隆という芸達者なキャストを得て、笑いを徹底的に追求するという三谷流喜劇の神髄を目撃せよ!!



藤原竜也、中村勘太郎(現・中村勘九郎)、吹石一恵のフレッシュトリオで、歌人・石川啄木の愛と人生をほろ苦くつづつた『ろくでなし啄木』(2011)、芸術監督・野田秀樹をフランスの英雄ナポレオンに配し、内野聖陽ら実力派キャストとともに、流刑にされたナポレオンの晩年と死の真相をミステリー・タッチで描き出した『おのれナポレオン』(2013)。話題作が続く東京芸術劇場のラインナップの中でも、そのクオリティと高いエンタテインメント性で、常に耳目を集めて来た三谷幸喜作品。同劇場での三作目となる新作書き下ろし『酒と涙とジキルとハイド』の上演が、4月に決定した。

今回も男優2人、女優1人の小さなカンパニーだが、ドラマやCMなど映像作品での躍進も著しい歌舞伎俳優の片岡愛之助、これが初舞台となる優香、NODA-MAPにも二度の出演を果たしているマルチ・タレント藤井隆と

いう魅力的な顔ぶれを見るにつけ、作品への期待は否応なく高まっていく。

劇作、演出を手掛ける三谷が「喜劇作家は僕の生涯の肩書きですが、ここ数年はシリアスな創作が続いていました。そこで今回は徐々に原点復帰し、爆笑に次ぐ爆笑の“コメディの神髄”とも言える作品をつくりたいと思ったんです」と意気込む、今作の舞台となるのは19世紀末のロンドン。映画やミュージカルでおなじみの、“飲めばたちまち別人格”になる薬を開発するジキル博士の実験室で、新薬をめぐる博士の恋人や謎の俳優(?)が繰り広げるスラップスティック&シチュエーションコメディ……らしい。もちろん、2月末時点作品の全貌を知るのは、三谷幸喜ただ一人である。

とはいえ、演じる俳優にあてて魅力的な登場人物を生み出すことに定評のある三谷だけに、出演者への想いを語る言葉はアツい。「映像で見る愛之助さんのエッジの利いた演技は、コメディ向きだと思っていたんです。そもそも歌舞伎俳優さんはコメディ・センスに優れた方が多い。この舞台でコメディアンとして新しいステップを踏み出していただけたら嬉しいですね。優香さんはずっと以前から舞台に誘っていて。志村けんさんとの“バカ殿”コントは見るたびに素晴らしく、毎回僕は感動していたんですよ。あの思い切りの良さは、絶対に舞台向きです。藤井さんは僕が初めて演出したチェーホフの『桜の園』に出演してくださったのですが、確かな技術と鋭い感性で、僕が意図した以上に僕の狙いを演技で具現化してくださる有難い俳優さんで。今

回僕も、この舞台を喜劇人・藤井隆の代表作にしたいと思っています。」(三谷)

一方、「06年の正月ドラマ『新選組!! 土方歳三最期の一日』以来、また三谷さんの作品に出たいと願っていました。念願がなつての今回。喜劇はほぼ初体験ですが、三谷さんという予測不能な天才を信じて、最後までついていきたい。」(愛之助)、「演劇は大好きですが観るだけで充分と思っていた私を、ずっと誘い続けてくださった三谷さんの言葉と、ここ数年、新しいことに挑戦したい気持ちが膨らんでいたことが一致し、舞台出演を決めました。人生一度の“初めて”を、33歳の今、こんな素敵なたちと一緒できるのはとても嬉しくて光栄です。」(優香)、「『桜の園』の打ち上げて『また一緒に舞台をやりましょう』と言ってくださった三谷さん。こんなに早く約束を守ってくださったことに、心から感謝しています。楽しくて、たくさん勉強になる三谷さんの稽古場に参加できることが、待ち遠しくてたまりません。」(藤井)などと、俳優たちから寄せられた言葉にも大きな期待が感じられる。

加えて迫田孝也と、パーカッショニスト・高良久美子らミュージシャン二人が生演奏で参加。舞台上で起こる笑いとは対照的に、盛り上げてくれること必至だ。

一作ごとに自身を進化させ、日本の演劇シーンに新たな章を書き加える男・三谷幸喜。その最新にして最高の笑いが、劇場を揺らすと音が間近に迫っている! 構成・文:尾上

**酒と涙とジキルとハイド**  
4月10日(木)~30日(水) プレイハウス  
※プレビュー公演 8日(火)、9日(水)  
作・演出:三谷幸喜  
出演:片岡愛之助、優香、藤井隆 ほか



詳細はP9へ

主催:フジテレビ/ホリプロ 共催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 協力:松竹株式会社 企画制作:ホリプロ

# TACT/FESTIVAL 2014

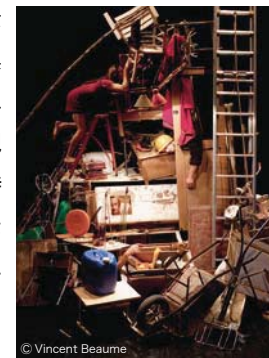
5月3日(土・祝)~6日(火・休)、9日(金)~11日(日) プレイハウス/シアターイースト/アトリエイースト/ロワー広場

詳細はP11、P15へ

カミーユ・ボワテル  
「リメディア〜いま、ここで」  
Camille Boitel “L’immédiate”  
5月3日(土・祝)~6日(火・休) プレイハウス  
構成・出演:カミーユ・ボワテル、マリヌ・ブローズ、アルド・トマ、パスカル・ル・コー、トマ・ド・ブローシア、ジャック・ブノワ・ダルダン  
構成補:ジェレミー・ギャリー、ブノワ・ファンケール、マルタン・ゴートロン

## フランス発“ヌーヴォー・シルク”の奇才、カミーユ・ボワテルに聞く。

カミーユ・ボワテルは、今、フランスで最も注目を浴びるヌーヴォー・シルク界の異端児だ。幼い頃に父親を亡くし、フランス南部トゥールーズ近郊の小さな町で、母親の手ひとつで育てられた彼は、8歳の時にたまたま町にやってきたサーカス団を見て、その魅力に取り付かれた。カミーユは、その後、たったひとりで練習を重ね、路上でパフォーマンスを見せては町の人たちを愉ませることに快感を覚えていく。そして14歳の時、母、そして幼い妹と三人で花の都パリに向かう。通信教育で中学の勉学をしながら、パリ近郊で妹と二人、路上パフォーマンスをしては生活費を稼ぐという生活が続け、その後、演出家のジェームス・ティエと出会い、いくつかの作品を共作後、テアトル・ドゥ・ラ・シテ・アンテルナショナルのサポートを得て、自らの作品を創作するようになる。



© Vincent Beaume

今回、上演される『リメディア』という作品は、舞台一面に所狭しと無造作に置かれた廃品の山の中を、6人のパフォーマーたちが、時にアクロバティックに、時にユーモラスに動き回る。パフォーマーたちの奇抜なアクションにより、舞台は手品でも見ているように表情を変えていく。まるで、舞台版『ピタゴラスイッチ』のような作品だ。作品のテーマは“Fragilite”つまり「もろさ」「はかなさ」だとカミーユは語る。「最悪の事態が起きた時や恐怖を感じた時、矛盾するようだけど、自分が生きていることを強く実感するんだ。そのような、複雑で交じり合った感情そのものを舞台上で表現したい。」母国フランスはもとより、リトアニア、タイ、スロベニアなど世界各地を巡りながら収集したたくさんのガラクタと共に、彼らはやってくる。初来日。



カミーユ・ボワテル

(パリ市内にて) 取材:編集部

劇団コーパス Corpus  
「夢見るための50の方法」  
5月9日(金)18:00/10日(土)16:45/11日(日)16:45  
シアターイースト 500円(全席自由)

劇団コーパス Corpus  
「ひつじ」  
5月9日(金)15:30/10日(土)14:30/11日(日)14:30  
ロワー広場 入場無料

劇団B-Floor B-Floor Theatre  
「ユーディの冒険」  
5月9日(金)16:15/10日(土)15:15/11日(日)15:15  
アトリエイースト 入場無料

ズィメルマン エド・ペロ  
「ハンスはハイリ〜どっちもどっち?!」  
Zimmermann & de Perrot “Hans was Heiri”  
5月9日(金)~11日(日) プレイハウス  
構想・演出・舞台デザイン:ズィメルマン エド・ペロ  
構成:ディミトリ・ド・ペロ 振付:マルタン・ズィメルマン  
出演:タレク・ハラビー、ディミトリ・ジュルド、ディミトリ・ド・ペロ、ゲール・サンティスティヴァ、メリッサ・フォン・ヴェビー、メティニー・ウォントラクーン、マルタン・ズィメルマン

## 楽しくて、やがて惹かれる 摩訶不思議な世界

「難解なダンスはつまらない。アクロバットは途中で飽きてくる」という人は多い。たしかに舞台美術がメインでほとんど踊らない舞台もあれば、アクロバットの連発だけで終わってしまう舞台もある。両方の長所を併せ持った舞台は…… ありますとも。それは「アート・サーカス」等と呼ばれ、高い身体性と素晴らしい美術が融合している舞台だ。中でも人気と質において世界最高峰といえるのが、今回来日するズィメルマン エド・ペロなのである。昨年は振付作品『シュフ ウシュフ』における来日で高い評価を得たが、今回は満を持して自らのカンパニーによる公演である。

この『ハンスはハイリ』は代表作で、長く来日を心待ちにされていた。高い身体性は、アクロバットよりも一見日常的な動きを意表を突いた多彩な展開をさせることに使われる。つまり「優れてダンス的な舞台」なのだ。

そして今回、美術的にも驚かされるのが「回転する部屋」である。四角に区切られた四つの部屋がグルグル回転するたび、天井は床に、ドアは落し穴に姿を変える。その内や外でパフォーマンスが行われるのだが、見た目の意外性ばかりでなく、優れたライブ・アートとなっているのである。

この舞台には、ほかの舞台ではちょっと見られないような魔法がかけられている。日常と思われていたものが続々変転していくなかで(だからこそかもしれないが)、人々はより強固に「日常」を生き続けようとするのだ。それは滑稽だが、ときに切なくも真実の姿である。この舞台は無条件に楽しめる一方で、忘れられぬ思いを胸に残す。それはあなたの人生を確実にひとつ豊かにしてくれるに違いない。



© Mario Del Curto

文: 乗越たかお (作家・ヤサクレ舞踊評論家)

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)※東京文化発信プロジェクト事業